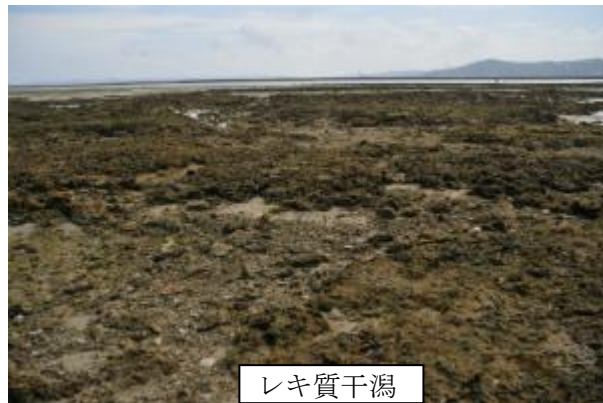




泥質干潟



レキ質干潟



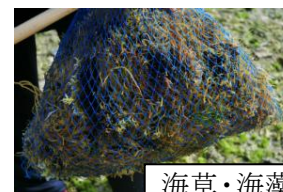
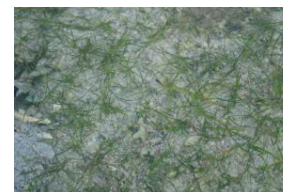
砂質干潟

泡瀬干潟周辺海域の水質や底質環境

泡瀬地区の位置する中城湾北部は、沖に広がるサンゴ礁と勝連半島に囲まれた水深 10m 以浅の海域と干潟域からなり、中城湾でも特徴的な地形となっている。サンゴ礁帯には岩盤が見られ、海底の底質は大部分が砂質と礫（れき；サンゴレキ）質からできている。中城湾をとりまく背後の陸域からは、地質的に島尻層由来のシルト・粘土分が降雨によって海域へもたらされる。この泥は、淡灰色でいわゆる赤土ではなく、クチャとよばれる泥である。

このような泥の堆積は、比屋根湿地内やその前面海域の一部（また、うるま市川田干潟周辺など）にみられ、泥質干潟にマングローブと呼ばれる林をつくるヒルギ類の生育やトビハゼ、トカゲハゼ、シオマネキ類などの特有な干潟生物の生育場所となっている。また、海域の深みに流れた泥は、航路筋や沖合の深みに堆積し、深場の泥質環境を好む生物の生息環境ともなっている。

泡瀬地区周辺海域における底質調査の結果からは、粒径（中央粒径値）が 0.1mm 以上、0.8mm 未満の砂の堆積が干潟域や砂州（さす）の周辺、海草藻場のみられる海域に広がり、干潟の奥や航路内の深みには粒径が 0.1mm 以下の砂泥や泥が堆積している。また、泡瀬地区には大きな河川の流入はない。しかし、小規模な排水路には周辺の市街地化に伴い公共下水道への接続が遅れていることで家庭排水などが集中し、一部では COD（化学的酸素要求量）の濃度が約 30mg/L と高濃度の排水が流入して干潟や沿岸海域へ汚濁負荷をもたらしている。現在のところは、周辺海域の水質の監視調査結果から、水質が環境基準値を少し越えることもあるが、通常は COD 1~1.5mg/L の状態であり、比較的清浄な海域となつてはいるが、今後も清浄な海域を保つためには、汚濁負荷対策を強化していく必要がある。泡瀬地区の海域自然環境は、大きく分けて干潟、藻場、サンゴ礁、沖合部の深みに区分できる。さらに生物相の特徴からみると、干潟では鳥類がよく飛来し、比屋根湿地に見られるマングローブ帯の生物相、トカゲハゼに代表される泥質の干潟生物相、ミナミコメツキガニやヘナタリ（ウミニナの仲間）、二枚貝類などがみられる砂質干潟、海藻類が生育し、巻貝やヤドカリ類、カニ類が多い転石やレキ質の干潟生物相に分けられ、藻場はリュウキュウスガモなどの海草藻場とコバモク、ヤツタモクなどのホンダワラ藻場の生物相に分けられる。干潟や浅海域に生息する生物は、微細な環境区分で生息場所が決定することが多く、例えば貴重種の干潟性魚類であるトカゲハゼや海藻類のクビレミドロは、底質の粒度や地盤高、干潮時の湿潤程度などによって微妙に生息・生育環境が限定されている。このような多様な生物を有する泡瀬地区では、これまで漁業が盛んに行われてきている。代表的なものとして、沖合の砂地を利用したオキナワモズクの養殖や海草藻場内に設置した刺し網などによる沿岸漁業であり、平成 15 年には沖縄市にて 483 トンの水揚げがあった。



海草・海藻



サンゴ礁